

新病院に向けてあらためて 安全・安心・信頼の医療介護を考える

第14回 同人社団グループ医療介護安全大会

安全文化は あなたの行動から

7月19日(土)、役員、健康友の会みみはら、来賓など409名の参加で医療介護安全大会を行いました。2000年のセラチア院内感染を風化させないと、2001年から開始して、今年は14回目を迎えます。新病院開設を半年余り後に控え、「新病院に向けてあらためて安全・安心・信頼の医療介護を考える」安全文化はあなたの行動から」をテーマに開催しました。

冒頭で実行委員長の河原林医師より2013年度の取り組みとして、ヒヤリハット報告の件数がこの間着実に増え、中でも軽微な事例が増えていることが報告されました。昨年度の推進月間で学んだ「ポジティブレポート(未然に防げた事例報告)」の捉え方で報告を上げる姿勢が少しずつ広がっていることをうかがわれました。また今年度の課題として、新病院での受診の流れに合わせた安全確保のシステムの整備、災害対策の策定などが強調されました。



医療安全管理室 河原林医師

記念講演では、全日本民医連医療安全委員長の根岸京田先生に「医療安全の新たな地平」と題してお話いただきました。医療安



根岸京田医師より記念講演

全のとりえ方について、「医療安全元年」と言われた1999年頃を境に、人は間違える(ヒューマンファクター)を前提としてエラーや重大事故を防ぐシステムや手順の整備が進められた時代から、さらに現在は、関わる人々の安全に対する意識や行動を高める取り組みに注目が向けられていることが紹介され、「チーム」で安全を確保する視点、チーム内での報告や指摘などコミュニケーション・ノンテクニカルスキルのレベルアップが強調されました。指定報告では、総合病院検査室、総合病院産婦人科病棟、泉州保健医療研究所から3演題。また、各職場から寄せられたポジティブレポートについて、大会実行委員会の選考により、高石診療所、総合病院放射線科、総合病院救急外来からの報告が優秀賞に選ばれました。

被爆者聞き取りの会 開催

7月28日(月)、鳳エリアで継続して取り組んでいる「被爆者聞き取りの会」を、今回は原水禁世界大会参加者も交えて、開催しました。メイン企画として被爆者の高木静子さん(86歳)をお招きし、被爆体験談を聞きました。

高木さんは当時17歳。広島高等女学校の校舎の中で被爆されています。爆風で崩れ落ちた学び舎の瓦礫の山から大ケガを負ったなかで必死に逃げ延びたこと、避難所では幼い子どもたちが大火傷で蛆虫(じむし)まみれになって次々と死んでいく様など被爆直後の地獄の様な体験、また

顔に残ったケロイドの痕に戦後も、周囲から心無い言葉をかけられ辛い思いをした経験、そして「被爆婦人の集い」の組織づくりや相談事業、核廃絶の運動で海外を含め訪問し、被爆の体験を伝えてきた経験をお話してくださいました。

原水禁世界大会参加者の感想



語り部の高木静子さん

体験談を聞いた参加者からは、「核兵器を二度と使わせたいいけないということ」を学び「核兵器を二度と使わせたいいけないということ」を学ぶことができました。

原水禁世界大会参加者の感想

同人社団からは、19名の職員・会員さんが参加しました。代表して、2名の感想を報告します。

耳原歯科診療所 事務 里崎 桂

広島のような原爆の歴史・記憶として声を聞き、戦争の悲惨さと核兵器の非人道的さを肌で感じました。集団的自衛権が認められれば、日本は戦争ができる国ひいては、「戦争を始める国」になると思うと正直ぞっとします。日本は、唯一の被爆国として、また9条を持つ国として、世

界に真の「平和」を発信する責務があると強く感じました。 8月6日は平和記念式典に参加しました。広島市長の平和宣言が印象に残っています。



「憎しみの連鎖でなく未来志向の対話ができる世界を」二度と広島のような悲劇が起きないように願うだけでなく、自らが行動を起こすことの大切さを、この大会に参加し学びました。 組織部 上村 友希